

## 〔紀行文〕

# ソ連（モスクワ）旅行

渡 辺 一 徳

今年（1971）夏、モスクワ市で開かれた、I. U. G. G. 第15回総会、ならびに巡検会に参加する機会を得たので、その時の事を紹介致します。

会の正式の名称はInternational Union of Geodesy and Geophysics XV General Assembly. といいこの中の一つにI. A. V. C. E. I. (国際火山学協会)があつて、日本から火山学会より18名が参加した。期間と内容は、7月31日から8月14日までが、モスクワ大学での講演会、8月15日から8月21日までがアルメニアの火山を中心とした巡検である。

私の見て来たことはソ連のごく一部であるので断片的なことしか云えませんが、大体の日程に従つて、今回はモスクワでのことを中心に紹介したいと思います。なお学問的なことが少ない内容になりますがお許し下さい。

旅行の概略は次の通りである。8月1日羽田発→1日モスクワ着。2日→15日モスクワ滞在。15日モスクワ発→同日アルメニア共和国エレバン着。21日モスクワへ。22日モスクワ発→23日羽田着。

8月1日 晴。午前11時に私は小野晃司氏（地質調査所）に会うべく羽田の出国者待合室についた。小野氏は既に来ておられて、にこやかに迎えて下さった。近くに我々と同じ目的の人らしい数人が見えるが、団を編成してはいないのではっきりとはわからない。やがてサンタのおじさんを連想させる外国人が近づいて我々に挨拶をした。この人は小野氏の友人であり、この旅行中色々と助けてもらうことになったアメリカ人のスワンソン氏

である。中食を済ませ、12時50分発モスクワ経由パリ一往きのアナウンスを待つが仲々アナウンスがなく、結局2時間半おくらせて我々の乗った便は15時20分ようやく離陸したのである。生まれて初めての飛行機と海外旅行（しかもソ連）ということで「これから本当に行くのだ」という興奮と緊張がもり上がつて来た。思えば今年1月1日に小野氏より正式に誘われて決心し、これまで準備して来たのである。我々の機はイリュージン22というソ連機であるが、機は次第に高度を増しながら15時50分には信濃川河口近くを通り日本海上空に出た。あいにく雲が多く下界は見えない。18時ころ（もう1時間以上前に日本海を渡り切り沿海州に入っているはずであるが）雲の切れ目から山地がのぞく。19時50分には山地を過ぎて平原の上を飛んでいる。ここがシベリア平原なのであろう。ただ広い草原と森林だけで人工のものが全く見えない。雲が多く下界は断片的にしか見えず時々河が見えるたびに地図を見るが、どこを飛んでいるか解らない。羽田を出て7時間後、初めて町が見えた。スチュワーデスがノボシビルスク付近だと教えてくれた。日本はすでに夜の10時ごろなのに太陽はまだ沈まない。太陽を追っかけて飛んでいるのでいつまでも昼が続くのである。ウラルは雲で見えず。この間2回目の機内食事があり、チキン、パン、サラダ、アイスクリーム、ワイン、ミネラルウォーターが出たがあまりおいしくなかった。23時、ウラルをこえたらしく、家、道、畑が多く見えるようになりやっと人が住んでいる世界に出たような気がした。やがて

モスクワに着く時間が近づいているので24時10分を東京とモスクワの時差6時間おくらせて8月1日18時10分に合わせた。やがて機は次第に高度をおろし、箱庭のような人家が点在し、畑、池、川などがはっきりと見え、人の姿も見えてきた。モスクワ市を彼方に見ながらシエレーチェボ国際空港に着陸した。18時15分でありすでに夕やみがせまっていた。羽田を発って約10時間を経ただけである。入国手続きが終りI. U. G. G. のロシア人関係者が出迎えてくれて、バスで市の中央にあるホテルブカレストへ案内した。空港はモスクワの中心から40kmも離れているのである。ホテルのフロントには中年のおばさんがいて、英語が良く通じなかったりしてずい分時間をくった。大変な疲れを覚えて、22時15分(日本時間2日4時15分)にモスクワ第一日目の眠りについた。

8月2日 晴。6時起床。開会式は10時よりクレムリンの大会宮殿(写真1)で開か



写真1 クレムリン大会宮殿と  
トロイツカヤ塔

れるということがけさになってわかったが、それに出席するにはモスクワ大学で登録をして組織委員会の発行した招待状がなければいけないとのことである。時間的にそうすることは間に合いそうもないので、小野氏、鈴木氏(職業訓練大)との3人で、何とかなるだろうということでホテルを出た。途中クレムリン前の赤の広場(赤というのはロシア語でクラスナヤといい美しいという意味である)を通る時、警官らしい人につかまり「立入禁止」ということで注意を受けた。クレムリンに入るために赤の広場の反対側のトロイツカヤ塔(写真2)に着いたが、チェックされ入ることを拒否された。ここで思案にくれていた我々の所へ小野氏の知人でカムチャッカの火山を研究しているロシア人のエールリッヒ氏が招待状を持って来てくれたのでうまくはいることが出来た。このエールリッヒ氏はこの日の昼には20ルーブル(8千円)貸してくれたりして我々を助けてくれた。大変世話になった1人である。開会式には各国から約2千人余り出席していた。モスクワ市長やソ連科学界の人々の祝辞が英語への通訳で聞けたがよく理解出来なかった。ロビーで簡単な中食をとることになったのだがこの時はまだドルをルーブルに交換する時間がなくて、ドルしか持たず大変困っている所へ先のエールリッヒ氏の助けがあったのである。午後アト



写真2 トロイツカヤ塔





写真3 モスクワ大学

ラクションでバレエ、コンサート、民族舞踊など大変すばらしいようしで歓迎してくれた。午後8時ごろに会議場であるモスクワ大学（写真3）に行き登録を済ませ多量の資料を受け取ってIAVCEIの開会式に出席した。6時半ごろホテルに帰り、街を見物するために外出した。町は下町だったせいか、大変古くみすばらしく、商店の品物も少ない。通行人もあまり多くない。小さい公園でモスクワ名物のアイスクリームを食べていると、ベンチには数人の身なりのあまり良くない老人がただ何かを考えこんだ様子で座っている。

うでを組んで楽しげに語り合っている若い2人もいた。8時45分ホテルで夕食をはじめたが、まだ外はうす明るく昼が長いのにびっくりした（緯度が高く夏であるので当然のことであるのだが）。

ここで我々の泊ったブカレストホテルの様子を紹介する。クレムリンの良く見えるモスクワ川の畔にあり、すぐ川向うにはモスクワ最大の規模と設備を持つホテルロシア（写真4）がある。ブカレストはこれと対照的な古い6階建の建物で部屋は1人用、2人用があり、いずれもバストイレはない。我々は5階の2人部屋で、小野氏と泊ることになっていた。部屋は殺風景でベッド2つ、洋服タンス、テーブル、椅子、洗面所という設備である。トイレは各階に1カ所あるがここは紙がなく（あるときも薬包紙みたいなもの）、日本から多量に持って行ったチリ紙が多いに役立ったのである。バスルームは全くなく地階にシャワー室が15～16在るだけで、毎日一度は地階までおりるという不便さである。レストランは1階に、ビュッフェが3階にある。我々は朝食はビュッフェで食ベ夕食はレストランで食った。ビュッフェのいい点は食事が



写真4 ホテルロシアと遊覧船



短時間で済むこと。食物が皿にならべられており注文には指でさせばよく、言語を必ずしも必要としない点（これは私にとっては最も好都合だったのだが）である。食事代は普通クーポンで払うが現金でもよく、朝食券は1ルーブル（400円）、昼夕食券は2.25ルーブル（900円）であり、クーポンはインツーリスト（ソ連国営旅行社）指定の所ではどこでも通用するので便利である。このように不便なホテルに14泊することになったのであるがこれも1泊（2食付）7ルーブル（2800円）ではがまんしなければならないのだろう。

8月3日 曇。朝食はソーセージ、ミルク（ヨーグルト）、パン、茶、バター、チーズで済ませる（320円）。会議のためにホテルと大学の間に設けられたバスで10時に大学に行き、Ocean floor spreadingのシンポジウムに出席したが、言葉が不便で十分な理解が出来ない（この会議の公用語は英語、ロシア語、仏語の3つである）。8月13日までは日曜を除く毎日10時から13時、15時から18時という時間には大学内で何らかのシンポジウムが行なわれ、自分の好きな所に参加できるように計画されていた。

ここでモスクワ大学について紹介する。モスクワ市はクレムリンを中心に、放射状に発達しており、その南西部数kmの、モスクワ川を渡った所にレーニン丘がある。大学はこの丘に建っている（写真3）。閑寂で清潔な場所であり、狭い日本の大学とは桁ちがいに広い。モスクワ大学は学者として著名なミハイル・ロモノソフが1755年に創立したもので、それを記念して1940年にロモノソフ記念モスクワ大学と呼ばれるようになったそうである。新校舎は1953年に完成し、中央部が34階両翼に17階の建物があって中央部の高さは240mにもなるのである。外側は赤い花崗岩であり、内部には大理石をふんだんに使った大変立派なものである。勿



写真5 モスクワ大学の講堂

論ソ連最大の大学で1500人を収容する大講堂（写真5、ここでいくつかのシンポジウムがあった）。19の講堂、140の教室、50余りの研究室を持ち、生徒数は昼夜間部を合せて3万人以上である。修業年数は文系5年、理工系5年半、授業料は無料で学生の80%は奨学金を受けているそうである。教職員数は4千人で14学部あるが特に理工学部が優秀らしい。大学は広大な緑の公園にとり囲まれており、あちこちのベンチに読書している学生が見られる。

8月4日 晴。今日も前日と同じシンポジウムに出席したが、世界各地での海洋底拡大の証拠らしいものが報告され、大変興味深いものであった。特に米国の一学者からの、四国と紀伊半島南端の海岸段丘の成因も、大平洋側から日本の地下にリソスフェアがもぐり込むために押し上げられたもの、という考えには、不勉強の私には大変おどろいたことであった。

8月5日 朝雨・後くもり。Volcanism and Upper mantle Earthquakeのシンポジウムに出席。日本から秋田駒が岳の噴火と地震についての発表があった。19時より火山の記録映画の映写会が催され、エトナ火山（イタリアシチリー島）とヘクラ火山（アイスランド）の活動の2本が上映された。噴火中の溶岩の採集や、溶岩流が川のように流下





写真6 赤の広場とレーニン廟

する様など2時間余り驚きの連続であった。

8月6日 晴。午前中は我々にあまり感心のないシンポジウムだったので欠席することにした。鈴木氏と私はクレムリンの周辺を散歩することにし、カメラのシャッターをパチパチやりながら歩いた。赤の広場に立ち、クレムリンの城壁をながめっていると、本当にモスクワに来ているのだという実感があらためてこみ上げて来る(写真6)。広さの感覚がよくわからないが、 $100m \times 300m$ 位ありそうな長方形をしており石だたみの落着いた広場である。中央部の壁の前にレーニン廟(写真6)があり色々な国の観光客で賑っている。赤の広場を挟んでクレムリンと反対側はグム(百貨店)である。グムの内はちょうど日本の名店街に似ていて多くの小さな店の集りである(写真7)。品物の種類は少なく円に換算するとかなり高く感じられる。クレムリンより北に延びるゴーリキー通り(モスクワ2, 3番の繁華街)をぶらつく。この通りの横に有名なプーシキンの像がある。小さなカフェで簡単な昼食をとる。ロシア人のおばあちゃんと一緒にあって、むこうから話しかけて来た。英語の全く話せない人であった

が会話集で色々な物の名前などを教えてもらい楽しい一時を過した。小麦粉をねったものを油であげたもの(名前を忘れた)、コーヒー、茶2杯(有料)、で引き上げた。水物が

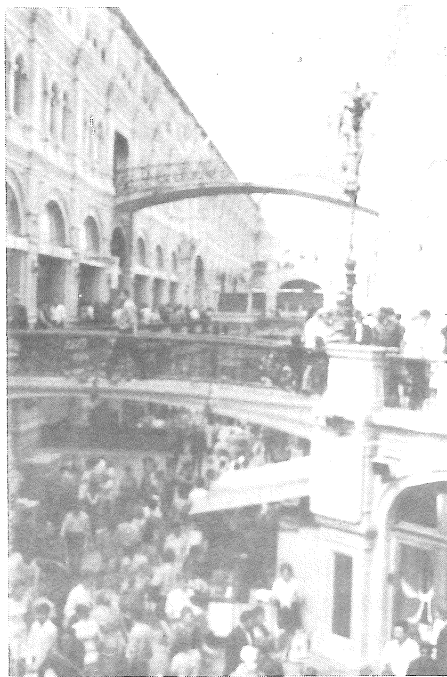


写真7 グムの内部

多くなるのは、飲料水が屋外に見あらず、自動販売機で売っているミネラルウォーターは、何とも云えないいやな味で私は飲めず慢性的に水分欠乏になっているからである。

午後は大学にある博物館の見学会に参加。自然科学のあらゆる分野にわたる非常に立派な展示がなされており、特に自然の再現を重んじた点などには感心させられた。案内も親切で印象が良かった。

帰り道で外国人には相当に難かしいと云われている買い物を小野氏と試みた。まず店に入り、ほしい品物の値段を見て、覚えておいて、店内にある別の場所で金を払う。金額を記入した紙をくれるのでそれを持って品物の所の店員に品物を指定して引きかえる。我々はこの方法で青い小さなリング 1Kg (200円)、さくらんぼ 0.5Kg (200円)を買ってみたのである。もう少しうるさい店では品物を渡す場所がさらに別になっている所もあるそうだ。

8月7日 曇。午前中大学。午後ホテルロシアのペリョースカに行き買い物。ペリョースカというのは各有名ホテル(町中にもある)にある外貨専門店である。ソ連のみやげものが沢山おかれていて観光客でいつもごったがえしている。品物も立派であり、その割に値が安いので我々はみやげもののほとんどをペリョースカで買った。ここで最も面白いのは

円やドルを出すと、つり銭がいろんな国の通貨でくれるので計算が合っているかどうかはつきりしないことがある(店員も適当にやっているようだ)。

夜7時からIUGG全体のレセプションがアルバートレストラン(カーニン通り)で催された。1~2階に約2千人位が集まり、テーブルの周りを自由に移動してワイン、ウオッカを飲んでごちそうを食べた。いろんな国の人と話すチャンスがあったが英語国の人々より、そうでない人達とが話しやすいのには我ながら英語力の不足を感じさせられた。又2階の手すりにグラスを置いて立ち話しをしていたら、危険だといってホステスに叱られる失敗もあった。会は9時ごろまで続いたが後半にはステージでダンスをする人達もいて大変なごやかであった。

8月8日 晴。日曜には会合はなく、私は鈴木氏と外出した。まずクレムリンのまわりを散歩し、すぐ近くのポリショイ劇場(写真8)、クレムリンから西側に延びるカーニン通り(写真9、ここはモスクワで最も繁華な通りでアパート、レストラン、本店などがある)。カーニン通りの終り近くのホテルウクライナ(写真10、大学によく似た建物で日本人客が多く、JALの事務所もある)を見て歩いた。午後、ウクライナのうらからモスクワ川遊覧船に乗って上流へ。この川は



写真8 ポリショイ劇場



写真9 カリーニン通り





写真 10 ホテルウクライナ

水深が4mもある運河になっておりかなり大きな運搬船を行きかっている。郊外まで上流へ行くと川岸のいたる所で、日光浴、水浴をする人で賑わっている。大きな水泳場で下船し鈴木氏は泳いだが私は上半身裸で日光浴の仲間入りをした。老いも若きも女性はビキニであるが写真はほとんど拒否された(写真11)。

8月9日 晴。夜、スワンソン氏のキラウエア火山を見たことが大きい収穫。映画で玄武岩が海水中に水あめのように流れ落ちるのが印象的であった。又今日まで一緒だった鈴木氏が明日レニングラードへ発つので、夕食

時にビールとワインを飲みながらお互いに今後の旅の無事を願って部屋へ帰った。

8月10日 晴のち雨。Acid Volcanismのシンポジウムで午前中に小野氏の阿蘇カルデラについての講演がなされた。帰りにホテルウクライナに立ち寄ったところ、夕方久しぶりに傘が必要な程雨でタクシーで帰ることにした。1人だったので言葉の点で不安だったがホテルの名前だけは通じたらしく走り出した。途中でロシア人らしい人を乗せて私に何か話しかけたが全くわからない。結局遠回りされたが無事に目的地に着いた。一般にタクシーの数は少なく、決められた場所では乗れないのであまり便利な乗り物とは云えないようだ。

8月11日 晴。先日申し込んでいたクレムリン見学に参加(クレムリンに入るにはインツェリストに申し込んでおかなくてはいけない)。10時に大学を出てクレムリンに向かう。クレムリンはモスクワ市の中央にあり観光客必見のものとなっている。総面積28ヘクタールの広大な面積をもち外形はほぼ三角形をしていて、周囲は2,235mの石の壁で囲まれ、壁の高さは5~19m、厚さ3.5



写真 11 モスクワ川の水浴

～6.5 m, 壁の上には銃眼があり20の塔を備えている。一般に公開されたのは1955年1月1日である。クレムリンという言葉は現在、ソビエト政府またはソビエト共産党本部の代名詞になっているが意味は「城塞」ということで1156年にユーリー・ドルゴルキーが小さい木造の砦をきづいたのが始まりとされている。現在の形になったのは1495年のことである。内部には開会式の行なわれた大会宮殿や、内閣、ソ連最高会議の行なわれる大クレムリン宮殿(写真12)、寺院などがあり、建物もさることながら内部の壁画、彫刻、その他は15～16Cのものらしいが、大変立派に保存されている。

8月12日 晴。大学の郵便局で日本へ本類を送る。これは会期中にいろいろの資料が増えたため、荷物制限が20Kgなのでできるだけ軽くするためである。ソ連では、小包は包装してはいけないようになっており、現物を持参すれば包んでくれる。従って中身を偽わることはまず出来ない。

I A V C E I の閉会式が11時半ごろ終わった。大学の裏庭のロモノソフ像の前で記念撮影をして解散。午後地下鉄で町へ出た。モスクワの地下鉄は世界に誇るものとして有名だが本当に立派なものである。系統は1つの環状線と数本の放射状線によって出来ているが、駅や通路は大理石をはりめぐらし、いたる所に彫刻がなされていて、シャンデリアまであるのである。又地下鉄の案内が良くロシア文字が読めれば間違いなく目的地へ行けるし、20円でどこへでも行けるので大変便利である。

8月13日 晴。午前中まだ終わっていないUMPの講演を聞く。午後みやげものを物色しに町に出たが良いものがない。

8月14日 晴。いよいよ明日はアルメニアに出発する日なので荷物をまとめ始めた。午後時間があるので郊外に行くことにした。中心部より16km離れた森の中にあるアル



写真12 大クレムリン宮殿

ハンゲリスク王宮博物館を見学する。ここは18C～19Cの貴族のやしき跡で、庭には大理石の裸像がならび、内部の装飾も目をみはるものである。貴族がいかに華やかな生活を楽しんでいたかを見ることが出来たような気がする。

8月15日 晴。午前中荷物をまとめ、モスクワ市の南にあるドモデードモ空港までバスで走る。途中、ヒマワリ畑や麦畑が見える。

いよいよ13時20分。我々はプロペラ機でアルメニア共和国の首都エレバンに向けて出発した。この項終り

※ 次回は野外調査を中心に報告の予定

